

平成27年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ

今年の和歌山インターハイでは、東京都の男子は4種目に優勝し、14種目に入賞する大活躍をしました。また、世界陸上北京大会には出場最年少ながらサニブラウン・アブレル・ハキーム選手（城西大城西高校2年）が日本代表として世界の強豪選手と堂々と競技した様子はみなさんご承知の通りです。

和歌山インターハイにおいて、東京都男子の競技レベルは全国最上位となりました。その競技力の高さを更に高め、来年度の岡山インターハイへ向けて1・2年生の躍進を期待します。

10月24・25日に群馬県で行われる関東新人大会出場を目指す本大会の展望をお楽しみください。

男子

・短距離

100m・200mでは、「世界チャンピオン」であるサニブラウン選手が出場しないことは残念であるが、今夏の活躍やこれからのスケジュールを考えると「やむを得ない判断」ではないだろうか。更なる飛躍を目指してもらいたい。また、200mで高校1年生ながら21秒34の記録を持つ井上 大地（東京）も和歌山国体少年男子B100mが今大会直後に控えていることから今大会は100mだけの出場となった。

そのような実力者が不出場でありながら、各支部予選ではなんと12名もの選手が10秒台をマークした。風のコンディションも良かったのかもしれないが、レベルのアップが証明される事実である。その中で、10秒8台をマークしているのが八王子高校の青 佳祐・武田 翔太の2年生コンビ、黒木 心貴（東京1）、村上 玲央（國學院久我山1）。これに井上 大地などか決勝進出をかけて熾烈に争う事だろう。

200mも100m同様だが、21秒台でなければ決勝進出がむづかしいかもしれない。その中で、天野 規朝（岩倉2）、武本 雄大（都東大和南2）も優勝争いに加わることが予想できる。

400mでは有力な3年生がいなくなりやや寂しい状況だ。都大会で48秒50をマークして2位とした藤本理玖（桐朋2）を中心としたレースとなるだろうが、城西大城西の海老原 拓哉、倉田 信太郎の1年生コンビ、清水 開登（八王子2）、星野 蒼太（都松が谷2）らが競り合いながら47秒台の優勝記録を期待したい。

・中長距離

ここ数年、予選がタイムレースであることから記録的レベルが上がってきた800mだが、今年も予選が大切になってきそう。レースの中心となるのは城西大城西の渡部 侑輝（2）松本 健志（2）伊原 達哉（1）のトリオと柴田 隆平（都東大和2）である。特に渡部は都大会での雪辱を今大会で果たしたいところだろう。予選のタイムレースから積極的なレースをし、決勝でも好タイムを期待したい。

1500mと5000mでは、有力選手が多かった3年生が抜けたことと、今大会の期間中に福島県白河市での駅伝大会に出場する学校も多いことから今大会に出場しない選手も多いようだ。こうなると、「混戦必至」な2種目となろう。そのような状況で、優勝を狙えそうなのは、1500mでは野上 翔大（都青梅総合2）が支部予選唯一の3分台をマークしており一歩リードといえる。800m専門の渡部・柴田や國學院久我山の中嶋 大樹（1）菅原 伊織（2）松浦 直彦（2）らにもチャンスがあるだろう。

5000mでは出場者全員に夏の鍛錬の成果を発揮し、駅伝シーズンへと弾みのつく好走ができることを全選手に期待したい。その中で、岡田 享也（拓大一1）が支部予選トップの記録をマークし優勝候補といえよう。3000mSCは、1500mで有力な野上がこの種目でも優勝を争いそう。対抗するのはこの種目だけに出場する寺田 健太郎（大東一2）だろう。ともに自己記録は9分40秒台だが、スピード・持久力共に高いことから9分20秒台での優勝が予想される。だが、この種目の経験が浅く走力のある選手の出場も考えられ、展開次第では上位に食い込むことが可能になる選手も出るだろう。最後まで粘り強く走り切りたいところだ。

・ハードル・競歩

110mHは、和歌山インターハイに出場した成澤 優雅（東京2）井上 大海（東京1）橋岡 優輝（八王

子2)の3名での優勝争いとなるだろう。その中で準決勝まで進出し14秒69にまで自己記録を伸ばしている成澤が一步リードしている。大会記録にも期待したい。

400mHは、52秒91のベストを持ち2年生全国トップ記録をもつ石山 翔瑛(東京2)の優勝は間違いないだろう。和歌山インターハイにも出場し経験も豊富なだけに51秒台と大会新記録を目指したいところだ。

5000m競歩では、和歌山インターハイで優勝した小野川 稔(東京実業3)と共に練習し、背中を追うように懸命に練習に取り組んでいる、秋山 匠太(2)が21分10秒台の記録と大会新記録を目指す。同僚の西野 陸(2)も21分台を目標に頑張ることだろう。

・跳躍

走高跳では、自己記録2m06を持つ飯野 公紀(東京2)の優勝は確実であろう。7月の選抜大会で自身初の2m超えを達成し、8月には2m06に自己記録を上げた。現在急成長中の飯野のジャンプに期待したい。竹内 達哉(都東大和南2)加藤 舜涼(都城東1)らにも関東選拔出場のチャンスがあるだろう。

棒高跳は、熊坂 優(東京2)が全国レベルの4m70を複数回跳んでおり、今大会では更なる記録更新を期待したい。跳躍技術には良いものを感じるが助走スピードに課題がある。その課題がクリアできれば4m80以上が可能となるだろう。入賞ラインは4m00か？

走幅跳は、和歌山インターハイで7m33を跳び4位に入賞し、国体にも出場する橋岡 優輝(八王子2)が優勝候補筆頭だろう。指導者でもある渡辺 大輔先生の持つ大会記録の更新もあるかもしれない。しかし、今年はレベルが高い。同じ国体少年Bに出場する酒井 由吾(都南多摩1)はアジアユースで活躍し7m30以上の記録を保持している。他にも7mジャンパーが複数いて激戦を極めそうだ。

三段跳びでは、香坂 俊光(都三鷹2)が唯一14mを超えており、他に14mに迫る選手が見当たらないことから優勝は間違いないだろう。15mに迫る優勝記録を期待したい。

・投擲

支部予選を見ると3年生が抜けた新人メンバーのレベルの低下が否めない。砲丸では13mを超える自己記録を持っている木村 知紀・岩本 高希の東京高校1年生コンビと大林 優生(保善2)の優勝争いとなりそうだが、13m台の記録では全国大会出場は難しいだけに更なる向上を望みたい。

円盤投でも40mを超えている選手がおらず寂しい限りだ。その中で38m台の記録をコンスタントにマークしている山下 直紀(桐朋2)は一步リードしていると言える。しかし、元丸 稜太郎(都田無2)蒲谷 淳史(東京1)河上 優人(保善2)との接戦が予想される。是非とも全国クラスの40mは超えてもらいたいものだ。

ハンマー投げでは、この種目で毎年全国大会に出場している保善高校の大林 優生(2)が、すでに52m台の記録を持っており優勝は間違いないだろう。同じ保善高校の河上 優人(2)、富永 天平(都多摩科技2)、石井 大稀(都府中工業2)が関東選拔出場を争いそうだ。

やり投げは、都大会優勝の黒田 翔(堀越2)が肘の故障から回復していれば優勝候補筆頭といえるが、まだ万全ではなさそうだ。そうすると最近急成長の原島 優亮(都青梅総合2)が優位となりそうだ。55mを超えると関東選拔出場となるだろう。

・リレー

4×100mリレーでは、東京・岩倉・城西大城西の3校が競り合うことだろう。なかでも東京は新チームながら41秒台を連発している事から最有力であると言える。42秒台が決勝進出か？

また、4×400mリレーでは上記の3校に八王子・都文京が加わり、関東選抜に出場する3位争いに激戦が予想される。3分23秒台くらいが決勝進出か？

・総合

トラック・フィールドともにバランスの取れている東京高校が連覇を伸ばしそうだ。これに、岩倉、八王子・城西大城西が上位を争いそうだ。また、今年は都立高校の活躍も多いだろう。都青梅総合・都文京・都三鷹などからも多くの入賞者が出そうだ。

平成27年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ

今年のインターハイで、東京都の女子は2種目に優勝し8種目に入賞した。男子同様現在の東京都の競技力は全国屈指である。今大会での結果を踏まえ、来年は更に上を目指すためにも今大会に期待したい。

10月24・25日に群馬県で行われる関東新人大会出場を目指す本大会の展望をお楽しみください。

女子

・短距離

100mでは、和歌山インターハイの準決勝にまで進出した福田 真衣（東京2）が11秒88にまで自己記録をのばす躍進を見せている。今大会の優勝は間違いないだけでなく、先輩エドバー イヨバ（東京3）のインターハイ2連覇に続く全国優勝も視野に入れることが出来る事だろう。そのダイナミックな走りからの加速は抜群で、たとえスタートが遅れても中盤からの素晴らしい伸びやかな走りは一見の価値がある。守田 紗矢香・中島 沙弥香の東京高校1年生コンビとの上位独占の可能性も高い。中学生だった昨年活躍した西村 琴葉（早稲田実業1）がここにきて復調してきたことから上位争いに加わりそう。200mも100m同様東京高校勢が優位だが、八王子高校の唐川 歩（2）・中山 綺夏（1）も上位争いをしそう。

400mは、1年生ながら55秒台をマークしている東京高校の井上 彩加が頭一つ抜け出している。スピードもありマイルリレーでも全国大会で各校のエース選手たちとも互角に競り合った力を持っているだけにその力はかなり高い。56秒台の記録を持つ唐川と400mHの平原 杏華（都松が谷2）が井上を追いかける展開となるだろう。優勝記録を是非とも55秒台前半にまで引き上げてもらいたい。

・中長距離

800mでは、和歌山インターハイに出場した陣在 ほのか（城西大城西2）が有力だ。好調ならば決勝のレースは彼女の独走となるだろう。記録的には2分10秒台を期待したい。陣在に対抗できるのは、志村 美希（白梅学園2）、岸 奈々子（都三鷹2）らで、2分15秒を切るレースを期待したい。

長距離は男子同様、白河駅伝に出場する選手も多いため、日程が重なる今大会初日の1500mに有力選手の出場が少ない。4分40秒前後優勝を争うのは、前田 梅香・甲本 まおの八王子高校1年生コンビと錦城学園の持丸 美佐子（2）らのデットヒートとなるだろう。

3000mでは全国駅伝を目指す順天高校の平賀 奏美（2）・和田 美々里（2）・伊東 明日香（1）のトリオと持丸、更には八王子高校の前田、甲本と東京高校の若菜 千裕（2）、揚原 七海（2）など、駅伝で全国大会を目指す学校の9分台の記録を持つ選手での争いとなりそう。

・ハードル

100mHでは、七種競技が専門の大野 優衣（白梅学園1）が13秒台を目前とし有力である。七種で高校1年生歴代新記録をマークした全国選抜でも和歌山インターハイでもこの種目で勢いに乗った。スピードよりも馬力が優っている感じで荒削りなハードリングだが勢いがあり安定している。優勝はまず間違いないだろう。大野に続きそうなのは、同じ七種競技で競り合っている栗原 理沙（都東大和2）、八尋 はるか（白梅学園2）だろう。共に14秒台前半で走りそう。

400mHでは、平原 杏華（都松が谷2）が、和歌山インターハイで準決勝まで進出し「あと一步で決勝」にまで力を伸ばしている。自己記録も1分00秒00とし全国レベルに達しており優勝候補筆頭である。今大会で是非とも1分を切ってほしいところだ。土肥 愛基（八王子2）も1分01秒台の記録をマークしてロングスプリントも実力があることから平原と競り合ってもらい、二人で大会記録を目指してもらいたい。

・競歩

今大会13名の出場となったこの種目であるが、競技人口ばかりか競技力もやや低下しそう。その中で、長谷 利咲（日大豊山女2）、栃原 紗耶（東京実業2）に27分台を目指した歩きをしてもらいたい。

・跳躍

走高跳では、和歌山インターハイに出場し、更には全国選抜の七種競技の中で1 m 7 0をクリアした栗原 理沙（都東大和2）が優勝候補最有力だ。しかし、助走が狂うと低い高さで苦しむことがあるので、そこだけがウィークポイントとなるだろう。同じくインターハイに出場した高橋 花織（専大附2）や、支部予選で好調だった大橋 夏海（都駒場2）がどれだけ食い下がるかが見どころだろう。関東選抜出場には1 m 6 5を跳ぶことが必要となるだろう。

オープン種目であるが、棒高跳で今年大活躍なのが青柳 有香（都雪谷2）だ。全国選抜で優勝し、3 m 8 0の自己記録は現在の全国ランク最上位であり、国体も優勝候補である。高校入学からこの種目を始めたが、体操競技を経験していることからバランス能力や身体調整力に優れ、今年になりメキメキと成長を遂げた。是非とも全国高校新記録に挑戦してもらいたい。この種目も（女子三段跳・女子ハンマー投とともに）、2 0 1 7年の山形インターハイから正式種目となるだけに多くの選手に挑戦してもらいたい。

走幅跳では、1年生の優勝争いとなるだろう。都大会で優勝した東 祐希（八王子）と1 0 0 mハードルで優勝候補とした大野との「一騎打ち」となるだろう。共に直後に国体出場を控え、6 mを跳ぶ潜在能力を備えているだけに楽しみな選手である。中田 嬉歩（白梅学園1）、佐藤 鼓（明中八王子2）、高畠 実咲（日工大駒場2）、も実力があるので上位入賞のチャンスもあるだろう。

三段跳は今年2 6名のエントリーと競技人口も増加傾向であり、競技レベルも向上中だ。すでに1 1 mを越えている選手も5名おり活況といえる。その中で、全国選抜で8位入賞を果たし1 1 m 8 2の自己ベストを持つ小川 瑞穂（都城東2）が1 2 mに迫る跳躍が期待できそうだ。久しぶりにこの種目で「東京都高校新記録」の声が聞こえるかもしれない。小川と共に練習している檜山 ひかる（都城東2）や林 希樹（八王子2）も1 1 mを越えているので上位をうかがうだろう。1 1 mのラインが入賞を分けそうだ。

・投擲

砲丸投では、インターハイに出場した草野 夏咲（東京2）が出場唯一1 2 m台の記録を持ち断然優勝候補である。しかし、春以来自己記録を更新していないだけに、今大会をきっかけに1 3 mへの足掛かりを作ってもらいたいところだ。小林 瑞生（東京1）、万波 アイシャ（岩倉2）など1 1 m台の記録を持つ選手にも1 2 mへのチャンスがある。来年の全国出場への目標となる1 2 mを超えてもらいたい。

円盤投では、インターハイに出場した徳田 沙那子（都三鷹2）、吉田 結花（日体桜華2）が3 6 m台の自己記録を持ち優勝を争うだろう。しかし、草野・田中 夢乃の東京高校2年生コンビも3 5 m台の記録を持ち現在好調だけに4名での争いとなりそうだ。そうなると関東新人出場をかけた争いも熾烈となりそうだ。争いの中から4 0 mに迫るビッグアーチを期待したい。

やり投げは、今大会出場者でまだ4 0 mを越えた自己記録を持っている者がいないのは寂しい限りである。その中で、まだ経験が浅い1年生ながら支部予選で3 7 m 4 1をマークしランキングトップの花村 春香（九段中東）の投げは力強い。野球を経験していることから「投げる感覚」が良く、投げる力を効率良くやりに伝えることが出来ており今後にも期待できる。4 0 mまでは問題なく投げる事が出来るだろう。力のある三橋 笑萌（日体江原2）や都大会3位の嘉本 葵（東京2）も優勝のチャンスがあり期待したい。

・リレー

女子の両リレーも東京高校の独壇場だろう。2種目ともインターハイでの優勝記録と遜色ない大会新記録の期待をしてもいいだろう。八王子も有力な選手が揃い全国クラスの記録が期待できそうだ。白梅学園・日工大駒場が上位入賞を目指しそうだ。

・総合

各種目全般に有力選手が多い東京高校が優位かと思うが、七種競技の大野 優衣が多種目で活躍するなど優勝候補の多い白梅学園の高得点も予想される。また、八王子も多くの種目で加点しそうな事から総合優勝争いからも目が離せない。